

—原著—

長野赤十字病院口腔外科開設後 20 年間の 入院患者の臨床統計的観察

櫻井 健人, 横林 敏夫, 清水 武, 五島 秀樹,
鈴木 理絵, 大久保 雅基, 上杉 崇史

長野赤十字病院口腔外科
(主任: 横林敏夫部長)

Clinico-statistical Observation on Inpatients during the past 20 years at
Department of Oral and Maxillofacial Surgery, Nagano Red Cross Hospital

Taketo SAKURAI, Toshio YOKOBAYASHI, Takeshi SHIMIZU,
Hideki GOTO, Rie SUZUKI, Masaki OKUBO, Takashi UESUGI

Department of Oral and Maxillofacial Surgery in Nagano Red Cross Hospital
(Director: Toshio Yokobayashi)

平成 17 年 10 月 20 日受付 11 月 30 日受理

Key words : clinico-statistical observation (臨床統計的観察), inpatients (入院患者), oral and maxillofacial surgery (口腔外科)

Abstract : We performed clinical statistical observations on Inpatients for twenty years, from January 1984 to December 2003, at the Department of Oral and Maxillofacial Surgery of the Nagano Red Cross Hospital. Some of the results obtained are listed below.

1. The total number of patients was 5,284, consisting of 2,997 males (56.7%) and 2,287 females (43.3%) : a male to female ratio of 1.3: 1. Patients in their 50s accounted for the most visits (16.3%), followed by those in their sixties and those in their twenties.
2. Patients living in Nagano city accounted for 61.1% of the total number of patients.
3. As for referrals, 3,381 were sent to us from other clinics, while the remaining 393 were referred from other departments within the hospital.
4. In terms of disease classification, 8.7% of the patients visited due to craniofacial deformities; 12.2% due to traumatic injury; 13.3% due to inflammation; 2.0% for oral mucosa disease; 27.2% due to cystic lesions, 15.9% for tumors; 2.4% for tumor-like lesions; 0.5% for temporomandibular joint disorders; 1.5% due to salivary gland disease, 0.6% for blood disease; 6.4% due to dental caries and periodontal disease, and 3.1% for general dental disorder.
5. The total number of operations performed on the inpatients was 3,588; 2,241 under general anesthesia and 1,347 under local anesthesia.

抄録 : 今回, わたくしたちは長野赤十字病院口腔外科の開設後の 1984 年 1 月から 2003 年 12 月までの 20 年間の入院患者について臨床統計的観察を行い, 以下の結果を得た。

1. 対象期間中の入院患者総数は癌患者等同一患者が複数回入院するケースもあり一部重複例もあるが, 5,284 名であった。
2. 性別は男性 2,997 名 (56.7%), 女性 2,287 名 (43.3%) であり, その比は 1.3: 1 であった。
3. 居住地域別では, 当科の位置する長野市が 61.1% と最も多く, 隣接する須坂市 5.3%, 中野市 2.7% 等であった。また,

県外からの入院患者は2.4%であった。

4. 院外、院内からの紹介患者の合計は3,774名(71.4%)であった。そのうち院外からの紹介が3,381名(89.6%)、院内からの紹介が393名(10.4%)であり、紹介医療機関の内訳をみると歯科・口腔外科からの紹介が2,734名(72.4%)と最も多く、ついで内科7.5%、耳鼻科5.4%、外科4.9%の順であった。
5. 疾患別では、発育異常・奇形・変形8.7%、外傷12.2%、炎症性疾患13.3%、粘膜疾患2.0%、嚢胞性疾患27.7%、腫瘍性疾患15.9%、腫瘍類似疾患2.4%、顎関節疾患0.5%、唾液腺疾患1.5%、血液疾患0.6%、う蝕および歯周疾患6.4%、一般歯科疾患3.1%等であった。
6. 同期間の中央手術室における手術件数は3,588件で、全身麻酔症例2,241件(62.5%)、局所麻酔症例1,347件(37.5%)であった。

結 言

長野赤十字病院口腔外科は新病院への移転を機に長野県北信地域唯一の口腔外科専門医療機関として1983年10月に開設され、2003年10月で開設満20年を迎えた。当院は現在、721床25診療科を有する長野県北信地域(診療圏人口約65万人)の中核医療機関であり、「地域支援病院」にも指定され、地元医療機関と密接な連携をとりながらあらゆる顎口腔疾患の診断、治療を行っている。

わたくしたちは、当科開設後20年間の外来患者の臨床統計的観察を行い報告¹⁾したが、今回、当科開設後20年間の入院患者の実態および動向を把握するため臨床統計的観察を行ったので報告する。

対象および方法

長野赤十字病院口腔外科の開設後の1984年1月から2003年12月までの20年間に当科において入院加療を行った5,284名である。なお、複数の疾患を有する場合は、より重度の疾患を優先して1症例1疾患とし、同一患者の複数回入院はそれぞれ1症例とした。これらについて年次別、月別、性別、年齢、居住地域、紹介医療機関、疾患別分類および中央手術室手術件数のそれぞれにつき臨床統計的観察を行った。

結 果

1. 年次別入院患者数

年次別にみると開設当初の1984年から1991年の間は年間150～200名前後で推移していた。1992年以降は200名以上を維持し、1997年に300名を越え漸次増加し、2002年、2003年の最近2年間は440名を越えた(図1)。

2. 月別入院患者数

月別にみると、8月が497名と最も多く、次いで3月の494名であった。1月、12月の冬季は少ない傾向にあった(図2)。

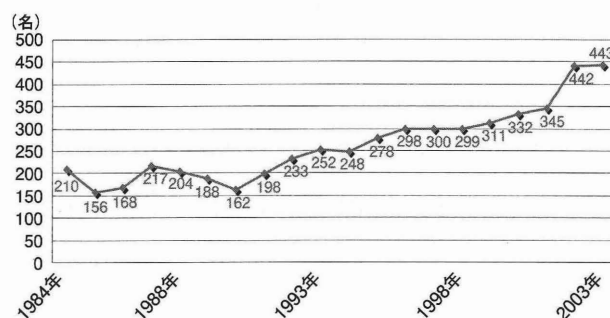


図1 年次別入院患者数

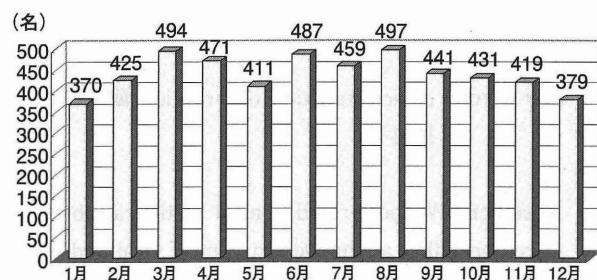


図2 月別入院患者数

3. 性別および年齢別入院患者数

性別では、男性2,997名(56.7%)、女性2,287名(43.3%)で男性がやや多く、その比は1.3:1であった。年代別にみると50歳代が863名(16.3%)と最も多く、次いで60歳代794名(15.0%)、20歳代707名(13.4%)の順であった(図3)。

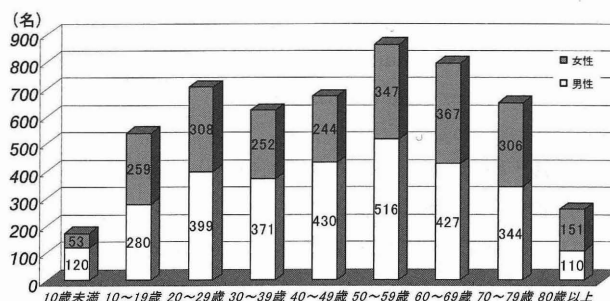


図3 性別および年齢別入院患者数

4. 居住地域別入院患者数

入院患者の居住地域別では、当科の位置する長野市が3,240名（61.3%）と最も多く、次いで隣接する上水内郡405名（7.7%）、須坂市289名（5.5%）、更埴市279名（5.3%）の順であった。なお、県外在住の入院患者は126名（2.4%）であった（図4）。

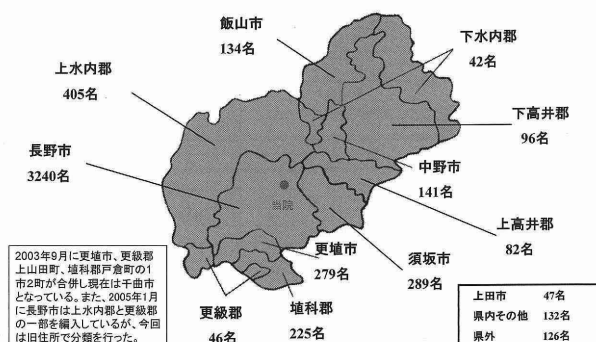


図4 入院患者の居住地域分布

5. 紹介医療機関別入院患者数

他医療機関および当院他診療科より文書にて紹介され入院となった患者は3,774名（71.4%）で、そのうち院外からの紹介が3,381名（89.6%）、院内からの紹介が393名（10.4%）であった。

院外紹介医療機関の内訳をみると、最も多かったのは歯科・口腔外科からで2,734名と全体の80.8%を占めていた。院内紹介医療機関では内科からの紹介が最も多く、次いで耳鼻科、形成外科、脳外科の順であった（図5）。

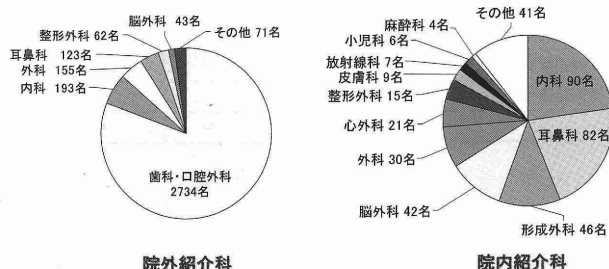


図5 紹介医療機関の内訳

6. 平均在院日数

平均在院日数は1985年が15.4日と最も長かった。その後は各年次ばらつきがあったが、1995年以降は1999年を除き徐々に短縮され2003年には5.7日となった（図6）。

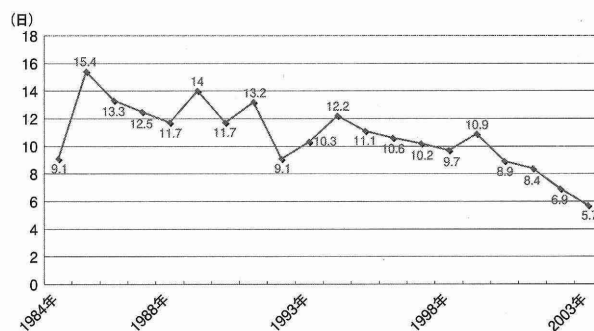


図6 平均在院日数の年次別推移

7. 疾患別入院患者数

疾患別に分類してみると、嚢胞性疾患が最も多く1,470例（27.7%）、次いで炎症性疾患704例（13.3%）、外傷644例（12.2%）、悪性腫瘍620例（11.7%）、発育異常および奇形・変形459例（8.7%）、う蝕および歯周疾患（要抜歯）339例（6.4%）、良性腫瘍222例（4.2%）、一般歯科疾患163例（3.1%）、腫瘍類似疾患128例（2.4%）、粘膜疾患107例（2.0%）、唾液腺疾患80例（1.5%）、血液疾患34名、顎関節疾患28名、その他286名。

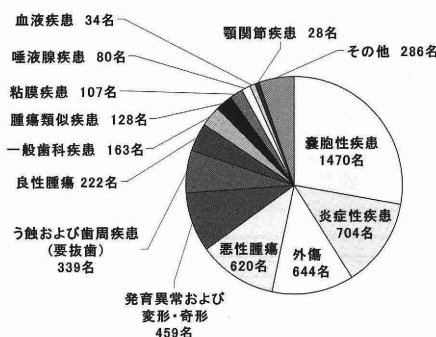


図7 疾患別入院患者の内訳

8. 疾患別観察

1) 発育異常および奇形・変形

発育異常および奇形・変形459例のうち、顎の奇形・変形が261例（56.9%）と最も多かった。次いで歯の埋伏（智歯、過剰歯を含む）167例（36.4%）、顎顔面の裂奇形22例（4.8%）であった（表1）。

表1 発育異常および奇形・変形

	症例数
1.歯の異常	
1) 萌出時期の異常	1
2) 歯の埋伏（智歯、過剰歯を含む）	167
2.小帯の異常	2
3.顎の奇形・変形	261
4.顎顔面の裂奇形	22
5.咬筋肥大症	6
計	459

2) 外傷

外傷 644 例のうち顎骨骨折が 581 例 (90.2%) とほとんどを占め、その内訳は骨体骨折が 488 例、歯槽骨骨折が 93 例であった (表 2)。

表 2 外傷

	症例数
1.歯の損傷	5
2.軟組織損傷	41
3.歯及び軟組織の損傷	10
4.顎骨骨折	
1) 歯槽骨	93
2) 骨体	488
5.その他 (打撲、頬骨骨折など)	7
計	644

3) 炎症性疾患

炎症性疾患 704 例のうち、顎骨の炎症が 345 例 (49.0%) と最も多く、そのなかで下顎骨骨炎は 149 例と顎骨の炎症の 43.2% を占めていた。次いで (歯性) 上顎洞炎 174 例 (24.7%)、口底炎・口底蜂窩織炎 67 例 (9.5%) の順であった (表 3)。

表 3 炎症性疾患

	症例数
1.歯周組織の炎症	15
2.智歯周囲炎	25
3.顎骨の炎症	
1) 上顎骨骨炎	74
2) 下顎骨骨炎	149
3) 顎骨骨髓炎	122
4.顎骨周囲の炎症	
1) 頬部・オトガイ下膿瘍、頬部蜂窩織炎、扁桃周囲炎	45
2) 口底炎・口底蜂窩織炎	67
3) 口蓋膿瘍	3
4) (歯性) 上顎洞炎	174
5) 外歯瘻	16
6) その他	7
5.リンパ節炎	7
計	704

4) 粘膜疾患

粘膜疾患 107 例のうち、白板症が 50 例 (46.7%) と最も多く、ついで口内炎 41 例 (38.3%) であった (表 4)。

5) 嚢胞性疾患

嚢胞性疾患 1,470 例のうち、顎骨に発生した嚢胞は 1,405 例 (95.6%)、軟組織に発生した嚢胞は 65 例 (4.4%) であった。

顎骨に発生する嚢胞の内訳は、歯根嚢胞 (残留嚢胞を含む) 528 例 (37.5%) が最も多く、次いで術後性上顎嚢胞 405 例 (28.8%)、含歯性嚢胞 249 例 (17.7%) の順であった。軟組織に発生する嚢胞の内訳は、ガマ腫 34 例 (52.3%)、頬表皮・頬皮嚢胞 14 例 (21.5%) の順であっ

た (表 5-1, 5-2)。

表 4 粘膜疾患

	症例数
1.口内炎	41
2.アフタ性口内炎 (慢性再発性アフタ)	1
3.帯状疱疹	8
4.天疱瘡・類天疱瘡	3
5.扁平苔癬	3
6.白板症	50
7.色素斑・メラニン沈着	1
計	107

表 5- 1 嚢胞性疾患 (顎骨に発生する嚢胞)

	症例数
1.歯根嚢胞 (含 残留嚢胞)	528
2.含歯性嚢胞	249
3.歯原性角化嚢胞	79
4.非角化性原始性嚢胞	84
5.術後性上顎嚢胞	405
6.切歯管嚢胞	37
7.単純性骨嚢胞	20
8.静止性骨嚢胞	1
9.上顎洞粘液嚢胞	1
10.病理不明	1
計	1405

表 5- 2 嚢胞性疾患 (軟組織に発生する嚢胞)

	症例数
1.粘液嚢胞	10
2.ガマ腫	34
3.頬表皮・頬皮嚢胞	14
4.甲状舌管嚢胞	3
5.鼻歯嚢胞	2
6.頬腺嚢胞	1
7.側頸嚢胞	1
計	65

6) 腫瘍性疾患

腫瘍性疾患 842 例のうち、顎骨に発生する良性腫瘍は 88 例 (10.5%) で、そのうち歯原性腫瘍は 73 例 (83.0%) であった。歯原性腫瘍の内訳はエナメル上皮腫 34 例 (46.5%)、歯牙腫 24 例 (32.8%) の順であった。軟組織に発生する良性腫瘍は 134 例 (15.9%) で、多形性腺腫が 56 例 (41.7%) と最も多く、次いで血管腫 35 例 (26.1%)、乳頭腫 11 例 (8.2%) の順であった。

悪性腫瘍は 620 例 (73.6%) で、下顎歯肉癌 127 例 (20.4%)、舌癌 123 例 (19.8%) と両方で 40.3% を占め、

次いで頸部リンパ節転移 57 例 (9.2%), 口底癌 46 例 (7.4%), 頬粘膜癌 45 例 (7.3%), 上顎歯肉癌 37 例 (6.0%) の順であった (表 6-1, 6-2)。

表 6-1 腫瘍性疾患 (良性腫瘍)

1.顎骨に発生する良性腫瘍	症例数	2.軟組織に発生する良性腫瘍	症例数
1.歯源性腫瘍		1.乳頭腫	11
1)エナメル上皮腫	34	2.線維腫	14
2)エナメル上皮線維歯牙腫	2	3.血管腫	35
3)エナメル上皮線維腫	1	4.リンパ管腫	4
4)腺様歯源性腫瘍	2	5.脂肪腫	6
5)石灰化歯源性嚢胞	5	6.神経鞘腫	3
6)セメント質腫	2	7.神経線維腫	3
7)歯源性線維腫	1	8.黄色腫	2
8)歯牙腫	24	9.多形性腺腫	56
9)粘液腫	2	計	134
2.非歯源性腫瘍			
1)骨腫	7		
2)化骨性線維腫	3		
3)骨軟骨腫	1		
4)黒色性神経外胚葉性腫瘍	2		
5)骨芽細胞腫	1		
6)神経線維腫	1		
計	88		

表 6-2 腫瘍性疾患 (悪性腫瘍)

	症例数
1.口唇癌	28
2.頬粘膜癌	45
3.口底癌	46
4.舌癌	123
5.下顎歯肉癌	127
6.上顎歯肉癌	37
7.口蓋癌	33
8.上顎洞癌	33
9.中咽頭癌	21
10.顎下腺癌	7
11.顎骨中心性癌	13
12.顎骨転移癌	6
13.頸部リンパ節転移	57
14.肉腫	9
15.悪性黒色腫	16
16.悪性リンパ腫	13
17.その他	6
計	620

7) 腫瘍類似疾患

腫瘍類似疾患 128 例の内訳は, 外骨症 (下顎隆起, 口蓋隆起, 骨隆起) 40 例 (31.3%), エプーリス 38 例 (30.0%), 義歯性線維腫 32 例 (25.0%) の順であった (表 7)。

表 7 腫瘍類似疾患

	症例数
1.エプーリス	38
2.義歯性線維腫	32
3.下顎隆起	28
4.口蓋隆起	5
5.骨隆起	7
6.歯肉線維腫症	6
7.その他	12
計	128

8) 顎関節疾患

顎関節疾患 28 例の内訳は, 顎関節脱臼 19 例 (67.9%) 顎関節強直症 6 例 (21.4%) 等であった (表 8)。

9) 唾液腺疾患

腫瘍を除く唾液腺疾患 80 例の内訳は, 唾石症 68 例 (85.0%) 唾液腺炎 11 例 (13.4%) 等であった (表 9)。

10) 血液疾患

血液疾患 34 例の内訳は, 再生不良性貧血 13 例 (38.2%), 血小板減少性紫斑病 9 例 (26.5%) 等であった (表 10)。

表 8 顎関節疾患

	症例数
1.顎関節炎	3
2.顎関節脱臼	19
3.顎関節強直症	6
計	28

表 9 唾液腺疾患 (腫瘍を除く)

	症例数
1.唾石症	
1)顎下腺唾石症	66
2)耳下腺唾石症	2
2.唾液腺炎	
1)顎下腺炎	8
2)耳下腺炎	3
3.シェーグレン症候群	1
計	80

表 10 血液疾患

	症例数
1.白血病	4
2.血小板減少性紫斑病	9
3.血小板無力症	1
4.血友病	3
5.再生不良性貧血	13
6.von-willbrand病	4
計	34

11) う蝕および歯周疾患

拔牙を要するう蝕および歯周炎は 339 例の 6.4% であった。

12) 一般歯科疾患

う蝕, 歯髄処置, 歯周処置, 歯牙破折等の保存処置が

必要な、いわゆる一般歯科疾患は163例で3.1%であった。その多くは、重度心身障害患者の集中治療の対象となったものであった。

13) その他

上記1)～12)の疾患群に分類されないその他の疾患は286例(5.4%)であった(表11)。

表11 う蝕・歯周疾患・一般歯科疾患およびその他

	症例数
う蝕および歯周疾患(要抜歯)	339
一般歯科疾患(C、P、保存的疾患)	163
その他	
1.いびき症	127
2.術後	35
3.顎堤吸収症	20
4.インプラント	18
5.口腔内異物	12
6.術後および歯肉出血	10
7.口腔前庭狭窄症	9
8.洞口腔瘻孔	6
9.その他	49
計	286

9. 中央手術室における手術件数および術式

対象期間中の中央手術室における手術件数は3,638件で、年次によりばらつきはあるが、1993年以降はほぼ200件前後で推移している。そのうち全身麻酔症例が2,243件(61.7%)、局所麻酔症例は1,395件(38.3%)であった。

手術術式については、顎骨嚢胞摘出術が838件(23.0%)、顎骨嚢胞摘出術+対孔設定術353件(9.7%)、歯根端切除術・抜歯術・う蝕処置などが312件(8.6%)、顎変形症顎矯正手術253件(6.9%)、顎骨骨折観血的整復固定術236件(6.5%)、良性腫瘍摘出術193例(5.3%)、上顎洞根治術167件(4.6%)等であった。悪性腫瘍手術については、悪性腫瘍摘出術133例(3.6%)、頸部郭清術+腫瘍切除術ないし顎骨切除術+遊離皮弁再建術38件、頸部郭清術+腫瘍切除術ないし顎骨切除術35件、

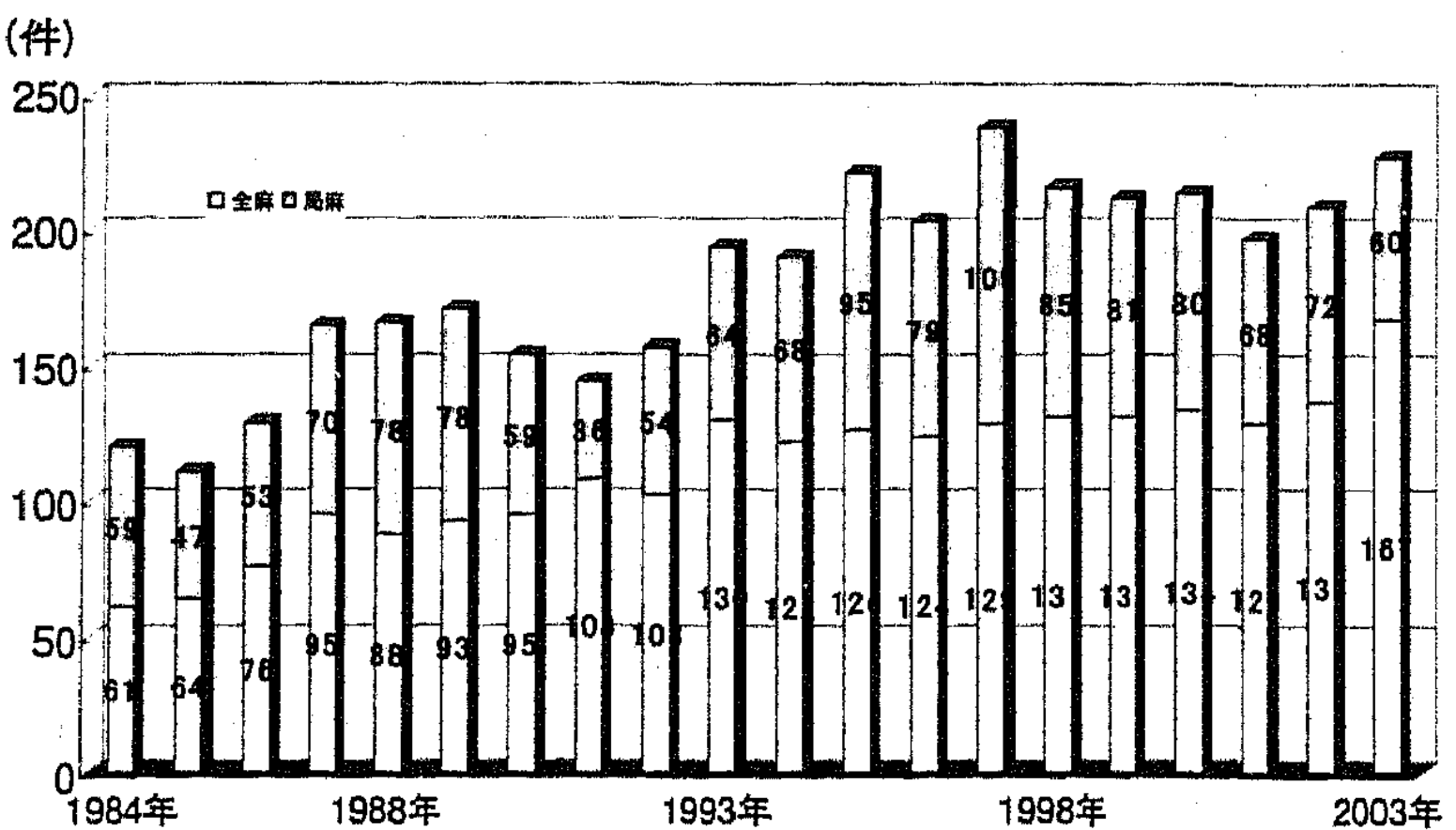


図7 中央手術室手術件数

表12 中央手術室における手術件数と術式

術式	全麻	局麻	計
顎変形症顎矯正手術	252	1	253
唇顎口蓋裂骨欠損腸骨移植術	21	0	21
顎骨骨折観血的整復固定術	214	22	236
軟組織損傷縫合術	18	8	26
上顎洞根治術	166	1	167
骨髄炎顎骨切除術	28	0	28
腐骨除去術・搔爬術	27	23	50
顎骨嚢胞摘出術+対孔設定	353	0	353
顎骨嚢胞摘出術	363	475	838
顎骨嚢胞開窓術	23	18	41
軟組織嚢胞摘出術	17	13	30
ガマ腫開窓術	6	13	19
ガマ腫開窓術+舌下腺摘出術	7	0	7
良性腫瘍摘出術	95	98	193
良性腫瘍顎骨切除術	28	3	31
良性腫瘍顎骨切除術+骨移植	4	0	4
悪性腫瘍切除術	90	43	133
悪性腫瘍顎骨切除術	34	1	35
悪性腫瘍切除ないし顎骨切除術+有茎筋皮弁再建	7	0	7
頸部郭清術	24	0	24
頸部郭清術+腫瘍切除ないし顎骨切除術	35	0	35
頸部郭清術+腫瘍切除ないし顎骨切除術+有茎筋皮弁再建	22	0	22
頸部郭清術+腫瘍切除ないし顎骨切除術+遊離皮弁再建	38	0	38
腫瘍類似疾患切除術	20	79	99
顎関節手術(骨折を除く)	14	5	19
顎下腺摘出術	49	0	49
唾石摘出術	8	10	18
埋伏歯抜歯術	87	17	104
歯根端切除術・抜歯術・う蝕治療、集中治療	111	201	312
インプラント手術	2	150	152
その他	80	214	294
計	2243	1395	3638

悪性腫瘍顎骨切除術35件等であった。(図7、表12)。

考 察

今回、わたくしたちは当科の開設直後の1984年1月から2003年12月までの20年間の入院患者について、その実態を把握するために臨床統計的観察を行った。

開設時は常勤歯科医師2名で定床5床であったが、その後入院患者の増加に伴い1987年には7床、1998年には9床、1999年には10床となり、常勤歯科医師も1994年に4名となった。現在は、常勤歯科医師4名、常勤歯科臨床研修医3名、定床10床である。

対象となった入院患者5,284名は同期間の当科外来新患数64,888名の8.1%で、即日入院した患者は792名で、外傷および炎症症例の患者がほとんどであり、入院患者全体の15%であった。

入院患者の年次別推移をみると、1992年以降は1995年を除き漸次増加し、2002年には前年を約100名上回

る大幅な増加を示した。これは、2001年より携帯型睡眠時無呼吸モニターを使用した2～3日入院下での睡眠時無呼吸症候群に対する診断を開始したこと、また、抗凝固・抗血小板薬服用中の患者に対して休薬せず短期入院下に抜歯を行うようになったこと、また複数の智歯の抜歯が必要な場合、短期入院下に全身麻酔下で一括抜歯する症例が増えたことなどのためである。

月別にみると3月、8月が多かったが、これは春休みや夏休みの時期であり、顎変形症手術患者など学生を中心とした手術がこの時期に集中したためと思われる。

性別では男性 2,997名(56.7%)、女性 2,287名(43.3%)であり、その比は1.3:1と他施設の報告^{2)~4)}と同様に男性がやや多かった。同期間における当科外来新患は、男女比1:1.3と女性が多く¹⁾、外来患者と入院患者では反対の結果であった。

また年代別では50歳代がもっとも多く、ついで60歳代、20歳代の順で他施設^{2~6)}とほぼ同様であった。50、60歳代の患者が多い理由として、嚢胞性疾患、腫瘍性疾患等の好発年齢であること、抗凝固・抗血小板薬服用患者の入院下での抜歯処置が多いためなどが考えられる。20歳代の患者数が多い理由として、顎変形症患者、複数の智歯一括抜歯および顎骨骨折患者等が該当したためと考えられた。

居住地別にみると、当院の位置する長野市が全体の61.3%と圧倒的に多かったが、長野市に隣接する地域以外の遠隔地からの患者も多く、当科が長野県北信地域の口腔外科専門医療機関として重要な役割を担っていることがうかがえた。

紹介患者数については、院外紹介患者は3,381名、院内紹介患者は393名、院内外紹介患者の合計は3,774名であり、その紹介率は71.4%と高率であった。紹介患者は外来新患患者の増加に伴い増加しており、2003年1年間の紹介患者は357名であった。院外紹介患者の約80%が歯科開業医(矯正歯科を含む)および病院歯科(口腔外科)からであり、地元歯科開業医と密接な病診連携がとれ役割分担がうまく行われている結果といえる。

平均在院日数は、20年間の平均では10.7日であったが、1995年以降は1999年を除き漸次短縮傾向を示し、2003年には5.7日まで短縮された。在院日数は他施設の報告^{7,8)}と比較して非常に短かった。2000年度からは診療報酬の改定があり、病診の役割分担が明確になったのを機会に病院経営に関する最重要方針として紹介率30%以上、平均在院日数20日以内という「3020」運動と称し、その目標達成に病院をあげて努め、クリニカルパスの導入などにより在院日数の短縮が図られた。

当科においては、在院日数短縮のため予定手術症例の術前検査を外来にて施行し、全身麻酔下の手術症例においても、原則として全例術前日の入院としている。長期

間の入院が予想される悪性腫瘍患者については、手術前に短期入院で全身検索および術前検査を行い、後日改めて術前日入院とし手術を行っている。また、術後に化学療法や放射線治療が必要な症例については早期に一時退院としている。開設後7年間の悪性腫瘍患者の平均在院日数が46日だったものが、2003年には16日と著明に短縮されていた。顎矯正手術症例についても同様に20日が12日に短縮されていた。

疾患別では、嚢胞性疾患が顎骨内1,382例、軟組織内が62例で計1,444例(27.3%)と最も多く、次いで炎症性疾患、外傷の順であったが、疾患の種類は非常に多岐にわたっていた。2000年以降の他施設の報告例をみると歯牙疾患が最も多いとする報告^{5,6)}、炎症性疾患が最も多いとする報告⁷⁾、嚢胞性疾患が最も多いとする報告⁸⁾、唇顎口蓋裂を中心とした奇形が最も多いとする報告⁹⁾など、各施設によってさまざまであったが嚢胞性疾患、炎症性疾患、外傷はいずれの施設でも大きなウエイトを占めていた。

発育異常および変形・奇形では顎変形症が261例と最も多かった。前半の10年間は72例であったが、後半の10年間は189例であり、特に最近4年間は年間24件程度の顎矯正手術を施行している。唇顎口蓋裂は、開設時より初回手術を当院形成外科が担当しているが、1999年より顎裂部の骨移植手術は当科で担当しており最近3年間では16例と増加している。

外傷患者は、当科開設後より1991年までの7年間は年平均36例で¹⁰⁾、1992年には43例となったがその後は徐々に減少し、2001年から2003年の最近3年間は年平均25例と減少傾向にあった。これは顎骨骨体骨折が前半の10年間の年平均28例から後半の10年間は年平均20例と減少したためと考えられる。

炎症性疾患、粘膜疾患については年次的にみて症例数に大きな変化はなかった。

顎骨嚢胞は、歯根嚢胞が年平均26例と最も多く、ついで術後性上顎嚢胞が年平均20例、含歯性嚢胞が年平均12例の順であった。歯根嚢胞は年次的にみても大きな変化はなかったが、術後性上顎嚢胞については1991年から1993年の3年間で年平均30件であった¹¹⁾のに対し、2001年から2003年の最近3年間の年平均は10件と著明な減少傾向を示していた。また、含歯性嚢胞については、前半の10年間で年平均8例であったが、後半の10年間は年平均17例と約2倍に増加していた。

良性腫瘍については、年最少4例から最多18例と年次によって症例数にばらつきがあったが増加傾向は特に認めなかった。

悪性腫瘍は年平均30例であったが、同期間の外来における悪性腫瘍新患患者は年平均19例であり¹⁾、入院処置が行われない症例もあることから実数としては15

例ほどと考えられる。年次的にみると前半の10年間は年平均14例であったが、後半の10年間は年平均47例で最近3年間の年平均は53件と明らかに増加していた。その理由として、新患の悪性腫瘍患者が増加したこと、同一患者が複数回の入院を繰り返すことが多くなったためと考えられる。その多くは歯科開業医、病院歯科（口腔外科）からの紹介であるが、耳鼻科や外科等の医科診療科からの紹介もあり、当科が長野県北信地域の口腔悪性腫瘍の治療機関として評価されている結果といえる。

中央手術室における手術件数は、1995年以降は2001年を除き200件を越えていた。現在、当院中央手術室における当科の手術枠は毎週火曜日午後、金曜日午前・午後、隔週水曜日の午前であり、全身麻酔症例については、全例中央手術室にて麻酔科の管理下で行われている。中央手術室における手術件数は、手術日枠の関係もありほぼ限界に近い数と考えられる。

手術内容別症例数では、顎骨嚢胞摘出術（+対孔設定）が1,191件と最も多く、全体の32.7%を占めていた。全身麻酔症例に限れば術後性上顎嚢胞が最も多かった。悪性腫瘍手術は294件であり、有茎または遊離皮弁による再建術も67件施行されていた。悪性腫瘍拡大切除後の再建は近年ほとんどが顕微鏡下での血管吻合を行う遊離皮弁で、当院においては形成外科が担当している。

以上、今回の結果より当科が開設時より口腔外科専門医療機関として地域医療に果たしてきた役割は大きいものと考えられる。今後も地元基幹病院、研修指定病院として他医療機関との連携をもとに、質の高い口腔外科医療をいつでも提供できるよう努めていきたいと考えている。

結 語

今回、わたくしたちは長野赤十字病院口腔外科の開設後の1984年1月から2003年12月までの20年間の入院患者5,284名について臨床統計的観察を行った。その結果、入院患者数の増加と在院日数の短縮が認められ、周辺地域医療機関との病診連携が十分に図られ、疾患内容も多岐にわたり、当科が北信地域の口腔外科専門医療機関としての機能を十分果たしているといえる結果であった。

文 献

- 1) 櫻井健人, 横林敏夫, 他: 長野赤十字病院口腔外科開設後20年間の外来患者の臨床統計的観察. 新潟歯学会雑誌 34(2) : 31-39, 2004.
- 2) 宮田和幸, 横田康正, 他: 当科における6年間の入院患者の臨床統計的観察. 日口外誌 36 : 2117-2123, 1990.
- 3) 藤本和久, 山家 誠, 他: 国立名古屋病院歯科口腔外科入院患者の最近10年間の臨床統計的観察について(1978~1987). 日口外誌 35 : 1338-1348, 1989.
- 4) 加藤雅民, 今井隆生, 他: 公立陶生病院歯科口腔外科における過去8年間の入院患者の臨床統計的観察. 愛院大歯誌 35(3) : 439-447, 1997.
- 5) 桂木明子, 鈴木将之, 他: 名古屋掖済会病院歯科口腔外科入院患者過去7年間の臨床統計的検討. 愛院大歯誌 42(1) : 117-122, 2004.
- 6) 加納欣徳, 長縄吉幸, 他: 大垣市民病院口腔外科における過去10年間の入院症例についての臨床統計的観察. 愛院大歯誌 40(1) : 217-222, 2002.
- 7) 南 弘子, 重松可明, 他: 島田記念病院歯科口腔外科における過去8年間の入院患者の臨床統計的観察. 明海大歯誌 29(1) : 118-122, 2000.
- 8) 若林 類, 佐藤志おり, 他: 国立栃木病院歯科口腔外科における過去10年間の入院症例の臨床統計学的検討. 栃木県歯科医学会誌 56 : 39-45, 2004.
- 9) 青山玲子, 高木律男, 他: 最近10年間の新潟大学歯学部附属病院第二口腔外科入院患者の臨床統計的検討. 新潟歯学会雑誌 31(2) : 153-157, 2001.
- 10) 横林敏夫, 氣賀昌彦, 他: 当科開設後7年間における入院患者の臨床統計的検討. 口科誌 40(5) : 1243, 1991.
- 11) 松田拓巳, 横林敏夫, 他: 最近3年間の術後性上顎嚢胞の臨床統計的検討. 新潟歯学会雑誌, 24(2) : 43-48, 1994.